

# 中野耕太郎著 『20世紀アメリカ国民秩序の形成』

(名古屋大学出版会、2015年)

松原宏之

1890年代から1920年代半ばにかけての国民再編過程を描いたモノグラフながら、その射程は現代に及ぶ。歴史学的な展望とともにアメリカ合衆国社会をどうとらえるべきかと問う書である。多くの読者にひもとかれるべき本格的な成果と言えよう。その試みを味読したい。

## 1. 「20世紀アメリカ国民秩序」へ

中野がこの世紀転換期に注目するのは、建国期から現代までのアメリカ社会の編成原理を見渡すときにそこが一大転機だからである。その見立てによれば、「アメリカ人」とは何者かについての了解に、人種・民族意識が食い込む「20世紀アメリカ国民秩序」が登場するのがこの時期であった。

この主張と個性を支えるのは本書の長い時間軸である。

アメリカの国民・市民をめぐる議論には分厚い蓄積があるが、中野によればそれらは大概において「シティズンシップなるものを非常にスタティックに捉えている」(20)。ロジャー・スミスやゲアリー・ガースルは、南欧東欧移民に同化を強いる試みと、黒人やアジア系移民を隔離する動きをとらえて、普遍原理に拠ってたつ市民ナショナリズムと人種、民族、性差といった性質に基づく本有的(人種的)ナショナリズムとの相克をみる。メイ・ナイやデヴィッド・ロディガーらは、市民ナショナリズムが人種主義をしばしば内包したことを重く見て、スミスやガースルらが前者に寄せる信頼を批判する。しかし中野の視座に立てば、これらはいずれも非歴史的な理解である。19世紀アメリカが直面した「激烈な社会変化と、その中から勃興した革新主義」(27)の思潮を勘案してこそ、同化と隔離とに舵を切る「20世紀アメリカ国民秩序」の性質を史的に理解することができると言うのだ。

ひろく社会学や政治学までを導きの糸に本書が見出す鍵は、19世紀末における「社会的な平等」観念の登場という歴史的变化である(40)。この事態の大きさと意味とに気づく中野は、世紀転換期に一方において改革が望まれ他方で同化と排斥への圧力もまた高まったことに内的連関があったのを鮮やかに明らかにする。

建国後のアメリカにおいて基本とされたのは、平等な市民たちがつくる小規模コミュニティであった。自立した個人が自ずとアメリカという共同体を構成するだろうという理念型である。ところが19世紀半ばから巨大化しはじめる産業社会は、地域住民から共同体運営の主導権を奪い、多くの都市民が上昇の機会もなく孤立した。この事態は、普遍的・理念的なシティズンシップを形式的権利として保障するだけであった合衆国のあり方を揺

さぶる。仮構されていたアメリカの理念が危機にさらされたとき、その復活を「社会的な平等」の実現によって図ろうとする者が登場した所以である。世紀転換期アメリカには社会改良を求める機運が満ちた。

まさにこの社会改良への努力こそが同時に人種民族的圧力を生んだことを見通すのが、歴史家中野の「アメリカ国民秩序」論である。投票や裁判などの度に形式的にのみ平等と連帯を確かめていた人びとが「社会的な平等」を実際に保障しようとしたとき、白人ならざる人種民族集団が顕在化せざるを得ない。「社会的な平等」を射程に入れた改革者たちは、その「平等」の域に達しうる者とそうでない者との選別にも着手する。「伝統的な市民主義を称揚しつつも、より強く人々のエスニックな出自や血統にこだわり、またネイションを個人の自由や社会契約を超えた、先験的な運命共同体」(5)としてアメリカをみなす者が台頭したのであった。大規模化・組織化していく「社会」という有機体を御すための方法とともに、工業化や都市化のなかで存在感を増す移民や黒人たちの集団を勘案したアメリカ人像が模索されたのである。

このとき一方で「社会的な平等」を望む者が、他方でこの人種民族間の格差を解消すべくときに同化を強いときに隔離を進めたのは、先行研究が言うような不変の理念ゆえではない。長い歴史学的な展望に照らせば、そのアンビヴァレンスは「20世紀アメリカ国民秩序」を特徴付けた世紀転換期の史的状況に由来し、それは1960年代まで存続した後はふたたび変貌していくのである。

序章から第1章にかけて開陳されるこの整理が第5章と第8章とを貫通して、全三部からなる本書の全体を統御していくことになる。革新主義期の基礎パターンを見ていくのが第I部である。第2章は選挙改革の努力が逆説的にも排除を生みだすのをあきらかにする。投票税や識字テストをはじめとする一連の制度改革は、貧しい黒人大衆から選挙権を奪う南部限定の人種主義にとどまらない。投票者の市民的資質を識字で測るという発想は、民主政の質向上を望む改革派リベラルの心をつかんだがゆえに全国で制度化され、実態としては移民や黒人たちから投票権を奪っていった。同様に第3章が解き明かすのは、社会科学的な知と実践こそが、下層民のなかに病的で拭いがたい貧困の文化が染みついていると刻印する機制である。改革者たちは都市の貧困を調査し改善しようと試みる一方で、その統合努力には人種や民族による限界が内包された。シカゴの公立学校で東欧移民自身が母語教育を求めた運動を描く第4章もまた、ハルハウスによる共感に満ちた支援が結局は移民たちに同化をうながすものだったことを見出す。

こうした規律統合と分離が格段に深化する第一次世界大戦期を描くのが第II部である。基調を示す第5章は、「民主主義のため」の戦争を標榜したウィルソン政権が、「民主主義」をもとめる広範な運動に発言力を与えるとともにそれらを戦時協力の傘下におさめていったと論じる。中野が目する労働組合の伸張は、戦時下の生産効率増進に資する限りで容認され、それは移民労働者に「良き市民」たれと求める一方で黒人たちを組織しなかった。この包摂局面をチェコ系とポーランド系に即して追うのが第6章だと言えるだろう。当初の単純なアメリカ化圧力が地方レベルでの中間団体に媒介されつつ多元的同化へと移行し、移民たちもまた「二重の忠誠」を持ちつつこれに応えた。第7章は、統合がもたらす「平等化」の潮流とカラーラインを明確にしようとする動きとの相克をみる。動員を支えた社会工学的な技法は、住民ひとりひとりを分類して把握してその隔離や規律を可能にし

たのである。

「20世紀アメリカ国民秩序」の仕上げを1920年代にみるのが第Ⅲ部である。第一次世界大戦の終わりを見据える第8章は、「上からの統治・組織化の原理」と「下からの平等化の情動」(229)との拮抗の末に、労働運動がコーポラティズムに包摂される過程を追う。「シカゴ人種暴動とゾーン都市」と題した第9章が描くのは、カラーラインに沿った分断の浸透である。そして「20世紀国民秩序の形成」と題した第10章は、エスノ・レイシャルな分断が制度化されていく1920年代を描きあげる。1924年移民法から異人種間婚姻を禁じた州法にいたるまで、革新主義的な「科学」が裏打ちして人種的他者が確定されていく。そのさまは、アメリカの編成原理が普遍主義か本質主義(人種主義)かではなく「市民的人種主義」と呼ぶべきものへと変容した現れであった。

そして終章が展望するのは、この「20世紀アメリカ国民秩序」がゆっくりと崩れていく1960年代以降である。「科学」がお墨付きを与えた「人種」の境界が、ボアズらの研究を嚆矢に再考され、冷戦下で民主主義をはじめとする普遍主義が喧伝されるなかで、20世紀アメリカの人種主義は原理的論理的に存続し得ない。アメリカ社会の現実に深く根を下ろした「人種」は払拭困難で「過ぎ去らない」ものだが、矛盾は次第に覆い得なくなる。膨大な史料を博搜しつつ19世紀から20世紀へのアメリカ史の展開を描ききる中野の力量に読み手は感服することになるだろう。

## 2. 「社会的なもの」を担保するとはいかなることか

さて、本書が提示した歴史像をいかに受け止めるべきだろうか。あらためて考えてみたい。

本書の要がその長い歴史的射程にあることを小稿は確かめてきた。19世紀型から20世紀型国民秩序へと原理の次元で起きる巨大な変化に注目するのが中野である。直接には1890年代からの30年間ほどをあつかいつつもそれを世紀単位の時間軸に位置づけたことで本書は、類書にない、いわばロバート・ウィービーに比肩するような展望を得た。急膨張した都市と産業社会とに対応できず、ひしめきあう移民たちが貧困と不衛生とにおびえ、労働争議とその封じ込めが騒然たる雰囲気を醸成するなかで、いかに「社会的なもの」を担保するかという課題が浮上したことの重みを知れと中野は言う。ここに視座を据えたことで、その課題の切実さこそが国民秩序再編の強力なドライブだったのが了解できるのである。

しかしそうだとすれば、とさらに問うてみよう。その重大な変化がいかに進展するかについて、本書は随分と駆け足で描きはしないか。旧体制では埒外だった「社会的なもの」の確保が望まれたとして、その新しいアメリカ社会はいったいどこまでを含むのであり、誰がどのように担い得たのだろうか。「社会的なもの」に対処できなかった旧体制を批判し乗り越えるという大変革は、いかに進展し、果たして成功したのだろうか。中野はこうした点には必ずしも照準せずに、本書の大部分をこの秩序の危機にあっていわばその産物として発見される移民と黒人の歴史にあてる。「社会的な平等」を求めるときにかれら下層民の存在が突きつけた差異はたしかに大きな課題だが、一足飛びに「国民秩序」と言っ

たことで従来の「秩序」のなかが問われたのが十二分に検討されずに、本書の焦点が人種民族問題に切り詰められていないだろうか。

印象づけられるのは、その人種民族の管理を担ってテクノクラートたちが着々と社会の主導権を握っていく様である。また、社会科学的な学知と国家機構の整備とともに国民の規律が順調に進展していく姿でもある。本書はウィービーを彷彿とさせる長い時間軸を設定するのだが、そこで生じる史の変動については案外と図式的におさえるに止める。その結果としてちょうどそのウィービー的にくらか古典的で順調にすぎる近代の登場を措定していないだろうか。

ところがたとえば本書も決定的画期とみる第一次世界大戦についてみれば、近年の研究が示唆するのは、総力戦体制下の規律権力の浸透と同時に、その規律化が容易に達成されずむしろ絶えず未完のままだったことでもあろう。開戦100周年を前に刊行されたシリーズ『現代の起点 第一次世界大戦』（岩波書店）は、中野も執筆者に加えて、現代的体制の飛躍の深化とともにその「未完」性もまた強調した。<sup>1)</sup> 中野よりもはるかに限定的なトピックをあつかっているが拙著もまた社会改良運動家たちの角逐を追って、20世紀初頭アメリカの国家機構と学知とが実のところ挫傷をかかえていなかったかと示唆した。<sup>2)</sup> 19世紀的な制度が有効性を失っていくとして、それがいかなる変容を遂げていくかは近代史再考の焦点である。20世紀アメリカの秩序像を長い時間軸で問い直そうとする中野の企図からすれば、アメリカ像、近代像をめぐるこうした議論といっそう直接に向き合いたいのではなかろうか。

### 3. 伏流水

実のところ、秩序原理の激変に注目していた中野こそがこうした論点をひそかに承知しているように思われる。あらためて読み返せば、本筋として描かれたエスノ・レイシャルな秩序の構築とは別に、「社会的な平等」を求める者たちの挑戦がたびたび叙述されるのに気づく。議論の骨格を支える第1章、5章、8章にそれらがあるのは、本書の底流にある模索の現れではなかろうか。

すなわち第1章にあるように、いち早く「社会的な平等」に関心を寄せたエドワード・ベラミーは、個人の自助では満たし得ず社会によって取り組まれるべき改革を夢見た。ヘンリー・D・ロイドらにとっては、その改革はなによりも労働の場において求めねばならなかった。なるほど第2章以降が指摘するように改革運動とその社会科学的なまなごしは黒人や移民たちを隔離や矯正の対象として捕捉していくが、初期の改良運動家たち社会学者たちが既存社会制度の痛烈な批判者だったことを第1章は書き留めている。経済学者リチャード・イーラーはソーシャル・ゴスペルの徒でもあり、アメリカがいまや個人の道

<sup>1)</sup> 山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『総力戦（現代の起点 第一次世界大戦 第二巻）』（岩波書店、2014年）；山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『遺産（現代の起点 第一次世界大戦 第四巻）』（岩波書店、2014年）。

<sup>2)</sup> 松原宏之『虫喰う近代——1910年代社会衛生運動とアメリカの政治文化』（ナカニシヤ出版、2013年）。

徳ではなく社会的な救済を必要としているとみて貧困問題や労働環境の改善に取り組んだ。本書後段で移民アメリカ化運動の推進者として登場するジェーン・アダムズは、社会事業という具体的取り組みを提示しながら既存制度を批判したのであった。労働者の生活水準向上に尽力したジョン・A・ライアンもまた富の再分配を果たす社会政策を要求した。いずれも、19世紀末に相次いで草創期をむかえる諸社会科学が既存体制の変革を求めるものだったという研究群とも平仄の合う事例である。かれらの関心は移民や黒人への介入という面だけではとらえがたく、より広く根底的な体制批判だったことを中野の叙述は含意している。

なかでも労働問題は中野の筆がとりわけ冴えるテーマである。第一次世界大戦期をあつかう第Ⅱ部への導入となる第5章は、論旨としては私的・社会的領域に国家が介入を強めていくさまを描く。しかし「産業民主主義の夢」と題した同章は、産業とりわけ労働の場において民主主義や平等の内実が問われたことに鋭敏である。「政治的民主主義が市民に対して自らの生活に影響を与えるような根本的な決定の過程に参加する権利を保障するのであれば、実際の市民生活が産業内の経済活動に大きく規定される以上、産業運営の過程で労働者にも一定の発言権が保障されるべき」(145)とする産業民主主義の論理は、新しいアメリカにおける制度と主導権のありようを深く問い直す。こうした申し立てはあくまで戦時下の生産効率向上のためにだけ聞き置かれたとみる一方で、1917年には史上最多を数えた労働争議が「戦争計画の根幹を揺るがしていた」(143)ことにも中野は目配りする。その丹念な叙述が取りこぼさないのは、妥協的なゴンパースや敵対的な資本家や司法の存在がかえって労働関係を不安定化させ、左派の台頭を呼び込むことである。「政治的自由は産業の自由があるところにのみ存在し、政治的民主主義は産業の民主主義があるところにのみ存在する」(148)と喝破したフランク・ウォルシュらについての描写も簡潔ながら力強い。シカゴのストックヤーズ労働評議会の活躍は、その活動が移民を国民化する経路であるとともに「戦後のより良い産業・社会構造の基盤」(162)を移民たちもが強力に要求した事例ともみえる。こうした種々の問いかけは戦後には見えがたくってしまうわけだが、そのことをもってそれらの問いが存在しなかったと言えるわけではない。本書が多くは論じなかった女性たちの批判と実践とをもしも加えれば、事態は異なる様相を見せるだろうか。労組、婦人運動、地域コミュニティによる「分権的でヴォランタリーな戦争努力」が統一的な勢力でなかったことは、国家とテクノクラートとが主導権をほしいままにしたことをただちに意味はしない。

やはり結論としては政治的労働運動の敗北を描くだけでも、第8章が記すのはシカゴ総同盟が「単なる経済闘争から、既存の政治秩序に異を唱える政治活動へと飛躍する事情」(233)である。国家への一元的な包摂とはほど遠いこの団体のありようはきわめて興味深い。総同盟を支持したヨーロッパ小国出身移民たちにとって、国際関係とそこへのアメリカの関与のあり方は大きな関心事であった。政府に対して妥協的なアメリカ労働総同盟(AFL)中央とは別に、よく組織化されていたシカゴ労組は独自の要求を辞さない。第一次大戦の終わりは、戦時下の協働要請のたががはずれて声をいっそう大にする素地であった。イギリス労働党の動向に学んで、かれらは社会民主主義的な政策を求めた。シカゴ総同盟がつくったシカゴ労働党は1919年の市長選には敗れるが、ローカルな基盤をもつその要求はAFL中央も無視しがたかったし、各地に連帯相手を見つけていた。組織労

働者を戦後アメリカは無視できまいとみる知識人は少なくなかった。かれらは政治的には統一戦線を強固にすることはできずに戦後の保守反動に敗れていくのだが、「社会的なもの」に対応できなかった旧秩序へのかれらの批判と対案は新しい体制にとってなんらかの遺産を残さなかったのだろうか。そこに人種民族的な分断がはられたらどうかを中野は指摘して余りあるが、この秩序のありようについてはまだ言い足りないのではなかろうか。

「現代アメリカの「社会的なもの」は、そのすべてが人種民族的なものに還元されたわけではない」(328)とは中野の言である。労働や学知をめぐるこうした折衝の過程もまた中野が書きたかったことだったと言うのはうがち過ぎだろうか。中野が構想した歴史的動態の書は、こうした局面を含み込んだときにいっそう立体的に姿を現すのではなかろうか。浩瀚な本書は、そのための芽や種をすでに豊かにかかえている。見事な達成にして、次への胎動に満ちた歴史書である。